

親鸞の往生理解

寺 川 俊 昭

かつて本学の『親鸞教学』第十三・第十四号に、上田義文先生が「親鸞の往生の思想」と題してこの主題についての先生の独自の見解を発表して下さった。小論は多少それに応答すべく、私の了解をまとめたものである。

一

1 (寺川)

往生とは浄土の仏教の根本関心であり、親鸞も亦一人の浄土の仏教者として、その著作、その語録に往生を語り続けたのであるが、彼の獲得した往生観は、浄土教の伝統的な往生観である未来往生、即ち肉体の死の彼方に往生を期待する念仏往生の教えをうけながらも、彼自身の求道の思索を通して、念仏に帰することによって現生の只中に往生が確立するという、極めて積極的な内容のものであること

は、既に多くの人によって指摘されている通りである。最初に、親鸞がある確信を以て往生について語るところに、耳を傾けよう。

(一)「願力摂取往生といふは、大願業力摂取して往生をえしむといへるころ也。すでに尋常のとき信樂をえたる人といふ也。臨終のときはじめて信樂決定して摂取にあづかるものにはあらず。ひごろかの心光に摂護せられまいらせたるゆへに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆへに臨終のときにあらず、かねて尋常のときよりつねに摂護してすてたまはざれば摂取往生とまふす也、このゆへに摂生増上縁となづくる也。」(『尊号真像銘文』)

(二)「即得往生といふは、即は、すなわちといふ、とき

をへず日をもへだてぬなり。また、即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得は、うべきことをえたりといふ、眞実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御こゝろのうちに摂取して、すてたまはざるなり。摂はおさめたまふ、取はむかへるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日をもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。」(『一念多念文意』)

(三)「かくのごとく、法蔵菩薩ちかひたまへるを、釈迦如来五濁のわれらがためにときたまへる文のこゝろは、それ衆生あて、かのくににむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆへはいかんとなれば、かの仏国のうちには、もろくの邪聚および不定聚なければなりとのたまへり。この二尊の御のりをみたてまつるに、すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり。」(『一念多念文意』)

(四)「浄土論曰。経言、若人但聞彼国土、清浄安樂、剋念願生、亦得往生、即入正定聚、此是国土名字為仏事、安可思議」とのたまへり。この文のこゝろは、もしひと、ひとへにかのくにの清浄安樂なるをきつて、

剋念してむまれむとねがふひとと、またすでに往生をえたるひとと、すなわち正定聚にいるなり。これはこれ、かのくにの名字をきくに、さだめて仏事をなす、いづくんぞ思議すべきやとのたまへるなり。安樂浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信する人にえしむとしるべしとなり。」(『一念多念文意』)

(五)「教使凡夫念即生といふは、致はむねとすといふ、むねとすといふはこれを本とすといふことばなり、いたるといふ、いたるといふは実報土にいたるとなり、使はせしむといふ、凡夫はすなわちわれらなり、本願力を信樂するをむねとすべしとなり、念は如来の御ちかひをふたごゝろなく信ずるをいふなり、即はすなわちといふ、ときをへず、日をへだてず、正定聚のくらゐにさだまるを、即生といふなり。生はむまるといふ、これを念即生とまふすなり。」(『一念多念文意』)

(六)「即得往生は、信心をうればすなわち往生すといふ、すなわち往生すといふは不退転に住するをいふ、不退転に住すといふはすなわち正定聚のくらゐにさだまるとのたまふ御のりなり、これを即得往生とはまふすなり。即はすなわちといふ、すなわちといふはとき

をへず日をへだてぬをいふなり。」(『唯信鈔文意』)

(四)「真実信心の行人は、摂取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心さだまるとき往生またさだまると。」(『末灯鈔』)

(六)「必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり。『経』には即得といへり、『釈』には必定といへり。即の言は、願力を聞くに由りて、報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり。必の言は審なり、然なり、分極なり、金剛心成就の貌なり。」

(『教行信証・行巻』)

これらの諸文によつて明らかなことは、第一に、親鸞はいわゆる未来往生として往生を了解する伝統の往生観をうけつつも、既に指摘したように、その了解を一步根源化して、本願の信を獲得したその時に、直ちに現生の只中に往生が成得されると了解したことである。私はこのことを、現生に往生道に立つといひ表わしたのであるが、このことはしばしばいわれているように、未来に必ず往生するものと確定した——ということとは、現在はまだ往生してはいないが——という意味ではある筈はない。勿論、親鸞も往生という言葉が表わす浄土教の長い伝統をうけているので

あるから、未来往生的な意味で往生を語ることも、絶無ではない。しかし親鸞が積極的な意味で往生を語るのは、必ずやこの現生の只中に往生を得るといふ意味においてであり、そこに親鸞の獨創性があるといふべきであることは、以上の引文による限り否定すべくもない。

第二には、このような積極的な往生観を、親鸞は『大無量寿経』のいわゆる「願成就の文」、

「諸有衆生、その名号を聞きて信心歓喜せむこと乃至一念せむ、至心に回向せしめたまへり、かの国に生れむと願ぜば即ち往生を得、不退転に住せむ、ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」

という教説によりつつ展開した。改めていうまでもなく、この教説の意味するところは、諸仏善知識の教えとの値遇において、衆生はよく一念の浄信を起こすのであるが、この一念の浄信とは如来清淨願心の回向成就の信心以外の何物でもない。だからこそこの信心は、取りも直さず清淨真実なる浄土を開示された願生心であり、この願生心において衆生はまさしく現生の真只中に、往生道に立つこととなるのであって、その往生道は真直に無上涅槃に連つていくのである。ほばこのように「願成就の文」の意を了解して、誤りはないのであろう。親鸞の、信心定まる時往生また

定まるなりというあの積極的往生理解は、ひとえにこの「願成就の文」の教説によって獲得されたものであったに違いない。

ある意味で通念となっている、親鸞が現生に往生を得るとするのは、ただこの「願成就の文」を解釈する時に限るのであって、むしろ例外的場合であるとする見解は、私は採らない。何故ならば、今われわれが尋ねている往生について、『歎異抄』は、「弥陀の誓願不思議にたすけられて」遂げるものと語っていることを想起したい。この『歎異抄』のいみじい言葉の意味するところについては、私は既に「誓願不思議——親鸞聖人の宗教的自覚の特質——」(『親鸞教学』第十八号所収)において考察した。その小論で尋ね当てたように、「金剛心の人」は、知らず求めざるに功德の大宝その身に満ち満ち」という、溢れるような謝念と確信に満ちた言葉が生きて表現している、流転の生の超克、あるいは生の意味の質的転換のところに展開する、汲めども尽きせぬというか、むしろ滾々と溢れるような感動に満ちた生の在り方こそが、親鸞が今更のように大きな確信を以て語る往生に外ならない。そしてこのような往生、即ち真実信心において質的転換を遂げた生をわれわれに語り告げる最も正確な表現を、親鸞は「願成就の文」の

教説に見出したに違いない。その意味で「願成就の文」を解釈しつつ、現生に往生を得ることを語る親鸞の了解は、決して例外的な場合などではなく、反対に親鸞が自己の己証として積極的にそして生き生きと往生を語る、まさにその立脚点を示すものというべきではあるまいか。

もとより親鸞は一人の真摯な仏教者として、伝統の経論を如何に訓むかという形で、自己の思想を形成しまた表現する。そして『大無量寿経』に「願成就の文」を見出したことによって、よき人法然との値遇によって賜わった、自己自身の感動に満ちた蘇りに始まる豊穠なる生の意味を、正確に「即得往生住不退転」と自証することができたに違いない。親鸞のこの思想的作業によって、それまで未来往生として肉体の死の彼方に期待されてきた往生は、まさしく信心によって現生の只中に開かれる新たな生の意味そのものであるとする。浄土教の歴史における決定的に重要な事業が果し遂げられたのであった。

第三に留意したいことは、このような意味において往生を得るということと、攝取不捨ということとは、深い関係があるということである。既に『歎異抄』第一章は、このことをわれわれに告げているが、親鸞は浄土真宗における救済を、この攝取という言葉を以て繰返し語ることは、

周知の通りである。とするならば、浄土真宗における救済とは、賜わった願生心において現生に往生を得る、言葉を換えれば往生の一道に立つということを意味することとなる。即ち現生不退として、親鸞は浄土真宗における救済を自証したのだということができるのである。

二

以上のように了解することのできる、極めて独自の内容をもつ親鸞の往生の自覚内容を、彼自らまた次のようなみじい言葉を以て表白する。

「しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きが故に、これを歓喜地と名づく。これを初果に喩ふことは、初果の聖者なほ睡眠し懶惰なれども二十九有に至らず。いかにいはんや十方群生海、この行信に帰命すれば撰取して捨てたまはず。かるがゆへに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰ふ。ここを以て龍樹大士は「即時入必定」と曰へり。曇鸞大師は「入正定聚之数」と云へり。仰いでこれを憑むべし、専らこれを行すべきなり。」(『教行信証・行巻』)

更に、この真実の行信によって往生道に立った生の意味を、「横超断四流」の解釈としてこのように表白するのである。

ある。

「断と言ふは、往相の一心を發起するが故に、生としてまさに受くべき生なし、趣としてまた到るべき趣なし。すでに六道・四生、因亡じ果滅す、かるがゆへに即ち頓に三有の生死を断絶す。かるがゆへに断と曰ふなり。四流とは則ち四暴流なり、また生・老・病・死なり。」(『教行信証・信巻』)

この大きな感動を託した表白は、真実の信心を獲たところ、今更の如く展開するものが、転依した生、即ち流転の生を超越した新たな生であることを、われわれに告げている。殊に「行巻」の文の終りに、親鸞が『易行品』の「即時入必定」、『論註』の「入正定聚之数」の文を引いて結んでいることは、直ちに私にあの『論註』冒頭の難行道・易行道の決判を想起せしめるのである。そこには周知のように、大乘菩薩道がまさに獲得し到達しようとする修道の課題として、阿毗跋致即ち不退転地に到るということが語られている。そしてこの不退の位に到る道として、難行道に對して信方便の易行が説かれていた。その易行道の内容は、

「易行道とは謂く、但信仏の因縁を以て、浄土に生れんと願す。仏願力に乗じて便ち彼の清浄の土に往生を

得。仏力住持して即ち大乘正定の聚に入る。正定は即ちこれ阿毗跋致なり。譬えば水路に船に乗ずれば、則ち樂しきが如し。この無量寿経優婆提舎は蓋し上衍の極致、不退の風航なるものなり。」

と述べられてゐるのである。これと對して今親鸞が、

「即得往生は、信心をうればすなわち往生すといふ、すなわち往生すといふは不退転に住するをいふ、不退転に住すといふはすなわち正定聚のくらゐにさだまるとのたまふ御のりなり、これを即得往生とはまふすなり。」〔唯行鈔文意〕

という時、それは大乘菩薩道がまさに到達しようと願ひ続ける不退転の位が、本願の信を獲得した時、はからずもその本願の行によつて転依した我の上に、与えられてゐる、換言すれば、本願の信が惹き起こす挙体的な廻心において、古き自我に死んで新しい生に蘇つた自己の上に、人間の分別をこえて自然に不退転という事実が実現しているという、驚きというか、感動というか、あるいは凱歌ともいふべき確信の表白なのであった。

だからこそ、親鸞が現生正定聚を以て往生の内容であると断言する時、往生浄土を以てのちとする浄土の仏道の伝統に立ちながら、実はあの不退転地を求めて止まぬ菩薩

道の志願の成就という、大乘の課題をその視野に見据えてゐるに外ならず、同時にまた、その課題に応答しようとする大乘菩薩道そのものの実現という歴史的意義を担うものでさえあった。このことは、親鸞が自ら歸し、また自己の信念として獲得した本願の仏道が、誓願一仏乗と高らかに顕揚されたこととあいまって、親鸞の課題が奈辺にあつたかをわれわれに告げる事実である。これが弥陀の誓願不思議にたすけられて往生を遂げるという、親鸞の独創的な往生觀のもつ仏教史的意義なのであった。

三

このようにして、親鸞によつて開顯された往生の積極的意味を、われわれは親鸞自らがわれわれに告げている言葉によつて、現生不退乃至は現生正定聚と尋ね当てた。しかしながらこのような了解をもつ時、いわばそれに対する一つの疑難として、いわゆる「往生即成仏」という往生理解が挙げられて、これが親鸞独自の往生觀であるとする主張が提出されるであらう。往生が取りも直さず成仏であるとするならば、現生に往生はあり得ないと。そしてこのことを示唆する親鸞の言葉は、ある重要な意味をもつて随所に散見する。

「即ち無明の闇を破し、速かに無量光明土に到つて、大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。」(『教行信証・行巻』)

「大願清淨の報土には、品位階次を云はず、一念須臾の頃に、速かに疾く無上正真道を超証す。」(『信巻』)

「念仏衆生は横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。」(『信巻』)

「往生とは、大経には皆受自然虚無の身、無極の体と言へり。」(『真仏土巻』)

これらの諸文は疑う余地なく、浄土に生をうけることは取りも直さず大般涅槃を証得することであるという、親鸞の積極的確信を告げている。それはもとより曇鸞の「畢竟成仏の道路」という浄土理解を、更に一步根源化した独自の了解であつて、浄土を無為涅槃界とする『無量寿経』の教説の伝統を、真直にうけ継ぎ展開させたものであることは、言をまたない。だからそのような浄土に生まれることを往生と呼ぶならば、宗学の伝統が理解し続けたように、「往生即成仏」と正当に理解すべきである。のみならず、この往生即成仏の往生觀に立つならば、煩惱具足の凡夫という身の現実がある限り、このような往生は、「臨終一念の夕」に実現すると期待する外はあり得ないこととなる。

しかしながらこのような宗学の伝統的「往生即成仏」の理解を金科玉条とするならば、これ迄尋ねて来たところの、あの現生不退を内容とする親鸞の独自の往生觀を、再び未來往生的往生觀と同じ立場に引き戻し、往生を現生の彼方、肉体の死の彼方に追いやってしまうこととなるであろう。だが、このことについて決定的に重要な指南が、「往生と成仏」についての曾我量深師の了解である。それは、次のように語られている。

「それで私つらつら思いますにですね、浄土というものはですね、浄土はこれはここに与えられたものである。成仏はこれはいわゆる身心一如——心と身と一体になつて成仏するのである。成仏は新しい仏の身——新しい仏身を成就して、そして成仏するものである。往生はこのうぶの穢身をもって往生することが出来るのである。そういうように大体考えられるわけでございます。

お聖教をずうつとよく見ますというと、往生は心にあり、成仏は身にあり、——こういうように大体領解することが出来るように思うのでございます。

それで、往生は心にある、と言うならば、すなわちわれらは、眞実信心を頂いたときに、如来の心の光明

をもつて照らし護って下さるというのであります
が、その心光照護ということは、すなわち往生とい
うことではなからうかと。こういうふうに考えて差支
ないのではなからうかと。」「(往生と成仏)」

「往生は心にあり、成仏は身にあり。」この命題に端的
に表現される師の了解に依つて尋ねるに、往生とは本願の
信に目覚めた端的に与えられる、信仰生活の感動であり、
そこから始まる生活である。浄土真実の行である名号に帰
することによって、衆生に開示された広大無辺の清浄なる
世界—浄土のはたらきに支えられた、感動に満ちた信仰生
活の道程である。『教行信証』『後序』の、

「慶ばしい哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法
海に流す。深く如来の衿袂を知つて、良に師教の恩厚
を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。」

という表白は、そういう往生道の風光を物語つて、余す
ところがない。その意味で往生とは、流転の生が還滅の生へ
転換し、その質的転換を遂げて真直ぐに涅槃へと方向づけ
られた生の意味以外の何物でもないというべきである。だ
から往生といつても、本願の信に賜つた生の新しい意味
であつて、実体的な生というわけにはいかないであらう。
それはあたかも曇鸞が世親の「帰命尽十方無碍光如来、願

生安楽国」の生を解釈して、

「生といふは、これ得生者の情ならくのみ。」(『論註』
と述べた通りである。「得生者之情」とは、信心の智慧に
よつて浄土を見出した者の感動という意味であらうか。そ
して、このように信心発起の端的から現生の只中に確立す
る還滅の生、即ち往生道の究竟するところが、証大涅槃で
あり、成仏であらう。前に引いた、宗学が「往生即成仏」
という往生観を示すものとして了解した『教行信証』の諸
文は、この意味で、往生の究竟としての成仏を語つたもの
であるに違いない。それは往生道に立つことのできた衆生
が、まさにその凡夫としての業を果たし終る臨終一念の夕
に証得するものが、無上涅槃の極果であると語つたもので
ある。往生の究竟としての成仏を、往生の究極であるから
こそ、やはり往生に包んで、往生という言葉で語ることが
決して誤りとはいへぬかも知れぬ。往生即成仏とは、この
ような了解であらう。しかしながら、親鸞が繰り返し語り
続けるその独自の了解に耳を傾けるならば、往生とは一つ
の道程であり、浄土を開示された衆生に賜わる還滅の生で
あると受け止めることが、最も祖意に忠実であると私は信
ずる。その意味から、私は往生とは現生の只中に往生道に
立つことだと了解することが、あるいは最も適切ではある

まいかと思うものである。

四

さて、これまでの考察によって、往生を親鸞に従って現生不退乃至は現生正定聚と理解したわれわれは、改めてその現生不退の内容を尋ねなければならない。

「すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり。このくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり。このくらゐにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、等正覚になるともとき、阿毗跋致にいたるとも、阿惟越致にいたるともときたまふ。即時入必定ともまふすなり。この真実信樂は、他力横超の金剛心なり。」(『一念多念文意』)

「如はごとしといふ。ごとしといふは、他力信樂のひとは、このよのうちにて不退のくらゐにのぼりて、かならず大般涅槃のさとりをひらかむこと、弥勒のごとしとなり。」(『一念多念文意』)

これらの『一念多念文意』の文で親鸞が語っているところによれば、現生不退乃至現生正定聚の内容とは、「必ず無上大涅槃に到るべき身となる」ことに外ならず、それは

言葉を換えれば無上仏道において退転しないという確信そのものであった。証大涅槃、これは『教行信証』以来、殊に晩年の和文の著作において、親鸞が繰り返し語る根本関心である。実はこの点に私は大乘の論師としての親鸞の佛をまざまざと見るのであるが、しかし親鸞がいう必ず無上大涅槃に到るべき身となるということは、所詮一つの主観的確信に止まるものではないのか、このような疑難は当然あり得るであろう。それに対して私は第一に、ここに引いた『一念多念文意』の言葉に続いて、親鸞が「安樂淨土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずる人にえしむとしるべしとなり。」と述べているところに注意したいのである。

この文において親鸞は、本願を信樂し淨土を願生するその信心において、安樂淨土の不可思議の徳が、分別をこえて信を得たその人の身に現前すると語っている。この驚くべき事実が『歎異抄』第一章の冒頭に、「誓願・不思議にたすけられる」という言葉で語られていたのであるが、この事実は取りも直さず『淨土論』のいわゆる不虛作住持功德であることは、前掲の小論において既に考察した通りである。

「よく本願力を信樂する人はすみやかにとく功德の大

宝海を信ずる人のそのみに満足せしむる也。如来の功德のきわなくひろくおほきにへだてなきことを、大海のみづのへだてなくみちみてるがごとしとたとへたてまつるなり。」(『尊号真像銘文』)

如来の功德、しかも「きわなく広く大きに隔てなし」と語られ、深広無涯底と讃嘆される如来の功德とは、改めていうまでもなく無上涅槃の徳に外ならない。のみならず、衆生に發起する本願の信心は、不虛作住持功德の文が語るように、本願力との値遇によって実現するものであるが、まさにその本願の廻向成就である信心の自覺に、われわれの分別を摧破して、あたかも向側から開かれるように、如来の広大無辺際なる無上涅槃の徳が、溢れんばかりに生き生きとはたらくのだ。『尊号真像銘文』の言葉は、明らかにこのようにわれわれに語り告げている。このことは言葉を換えて、本願の信が生き生きと現前している時、その本願の信を得た信仰的実存の全体に、無上涅槃の徳が疑うことのできない確かな事実として現に事実としてはたらくのであり、信仰的実存の全体が、無上涅槃のはたらきを受けるものとなる、と了解してよいのであろう。勿論、凡夫の身のままに現生において無上涅槃を証したというてゐるのではない。本願の信において、無上涅槃のはたらく機に、

凡夫の身が転成したのである。その實際が、流転の生が転ぜられて、還滅の生である往生の一道に立つということである。だからこそ繰り返していうように、往生とは本願の信の發起する端的に、往生道に喚び帰されるという自覺として獲得される。新しい生の意味に外ならない。

既に曇鸞の「生といふは、これ得生者の情ならくのみ」に依つて了解した通り、往生とは浄土に開かれた生である。その往生の如何なる一步をとつても、それを根拠となつて与え、そこに事実としてはたらいっているのが、不虛作住持持功德としてはたらく浄土の徳用であり、畢竟するに無上涅槃の徳用である。だからこそ親鸞が明らかにしたように、現生不退を内容とする往生の歩みは、必ず証大涅槃に究竟していくのである。

往生の如何なる一步も、無上涅槃のはたらきに触れている。このことが「必ず無上涅槃に到るべき身となる」という確信の、具体的内容である。かつて厭離穢土・忻求浄土の切実な祈求に立ちながらも、穢土の彼方、現生の彼方に期待されてきた往生が、こうして今、親鸞の深い聞思の思索をまっけて、あの誓願不思議という否定しようにも否定することのできない、朗々堂々たる根源的原理が尋ね当てられた時、一転して現生の只中にこのような瞠目すべき無碍

道の事実として、獲得されたのであった。この開眼の指針となったものが、『大無量寿経』の「願成就の文」であったことは、既に述べた通りである。

この積極的な往生を実現する本願の信を願生心として表白し、かつ展開した歴史的証言といふべきものが、まさしくこの『無量寿経』の優婆提舎である世親の『願生偈』であった。その冒頭には、

「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」

と、教主世尊の『無量寿経』の教言に賜わった一心帰命の純潔な信が表白され、間髪を容れずそれが「願生安樂国」と、願生心として展開しているのである。この願生心は『願生偈』が美しい偈頌をもって浮彫りにしたように、「三種莊嚴二十九種功德」として表わされる安樂浄土を、願生心自体の超越的根拠として見出しかつそのはたらきに支えられたものであり、そうであるからこそ、世親がいみじくも、

「我作論説偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安樂国」

という頌で自らの願生心の表白を結んだところの、まさにその「普共諸衆生往生安樂国」という願いを内容とするこ

ととなるのである。そしてこの願いを生きることを、信仰の決して放棄することのない祈りとして保ち続けて行く。何故ならば、『浄土論』の解釈を通して曇鸞が明らかにした浄土の徳は、親鸞の了解においては信心の徳と不二不異、むしろ一如であるからである。その意味で、如来の不虛作住持功德を根本としてそこから展開し、持厳住持三宝功德に具体化していく浄土の菩薩莊嚴の功德は、そのまま願生心に影を映して、願生の行者の上にはたらいいていくからである。

このように尋ねてくるならば、少くとも親鸞が弥陀の誓願不思議にたすけられて遂げるものと了解したような往生は、現世を穢土と厭離して、現生の彼方に往生を期待するものではあるべくもない。反対に、本願の信として賜わった願生心は、そこに厳然としてはたらく誓願不思議という道理に支えられて、清浄真実なる浄土の無上涅槃の功德をここに映し、初めて真に穢土を厭離することのできた心であると共に、一転してこの穢土の只中に無碍道に立つて安住することのできる心となるのである。いわば穢土を超越し、更に穢土に超越する。これこそが本当に誓願不思議にたすけられて遂げる往生ではないであろうか。身は穢土の只中にありながら、本願の信において溢れんばかりに賜わ

る清淨真実なる浄土の功德の恩恵によって、安んじてその穢土に耐えていくことができるのである。

曾我量深師の歴史的表白を、私は思い起こす。それは、

「信に死し、願に生きん。」

という言葉である。恐らくは善導の「前念命終、後念即生」を遠く踏まえ、それに対する親鸞の、

「本願を信受するは、前念命終なり。即ち正定聚の数に入る。文。即得往生は、後念即生なり。即時に必定に入る。文。

又必定の菩薩と名くる也。文」(『愚禿鈔』)

という了解に依って感得されたに違いないこの表白がわれ

われに告げているように、一念一念を法蔵の願心に従って生きようとする願い、即ち信仰の呼び覚ます、一切の有縁の人と共に安樂浄土に往生したいとの祈りに立って、業を果たすまで穢土に耐えて生きて行く。これこそが、現生不退を内容とする。誓願不思議が実現する往生のすがたではないであろうか。このような往生を、親鸞は『大無量寿経』が教え告げている廣大智慧の名号に帰することによって衆生に実現する「難思議往生」と了解したに違いないのである。

(本学教授 真宗学)